

〈活動報告〉

20 年にわたる友好交流が生んだ新たな局面

王 萌^{*1}

The New Development of 20 Years of Friendly Exchanges

Wang Meng^{*1}

1. はじめに

中国の鄭州大学は2001年に岡山大学と大学間交流協定が締結されて以来、2021年でちょうど20周年を迎えた。大学では研究分野の多様化、学際融合が進む中、両大学間の交流と協力も新たな局面を迎えている。2021年11月27日、鄭州大学歴史学院・外国語学院、岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科・グローバル人材育成院・上海事務所の間で、オンラインによる学術交流会が開催された。双方はそれぞれの研究の特長や、共通分野の研究について発表し、今後の教員・学生間の交流形式について意見交換を行った。

以下の表は、学術交流会の概要である。

2021年度 学術交流会の概要

開会の挨拶	吉葉 恭行（岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科副研究科長） 安 国棟（鄭州大学歴史学院院长）
岡山大学研究紹介	司会 本村 昌文 通訳 李 憲龍
	吉葉 恭行（科学史技術論、研究科の紹介）
	本村 昌文（日本文化論）
	日笠 晴香（臨床死生学）
	難波 えみ（日本語教育）
	毛利 貴美（日本語教育）
	村上 麻佑子（日本古代史）
鄭州大学研究紹介	浅井 雅（近世思想史、教育史）
	司会 吳 志遠
	通訳 修 曉南、張 燕燕
	吳 志遠（歴史学院の紹介）
	魏 涛（儒教思想）
	李 莎（人口史、医療史）
	馬 偉華（科学技術史）
	王 萌（日本思想史）
	鄭 晔楚（日本近世史）
	張 燕燕（日中文化交流史）
	郭 崇（日中文化交流史）

2. 学術交流会までの経緯

私が中国南開大学日本研究院の博士課程に在籍していた2014年、同学院開催の学術会議に吉葉恭行先生がご出席の上、講演を

された。その後、私は日本思想史学の先駆者である村岡典嗣（1884年～1946年）を研究対象として、博士論文の執筆を始めた。村岡典嗣は当時、中国ではほとんど知られておらず、先行研究も限られていた。本村先生はこの方面で多くの開拓的な研究を行っており、その研究成果から貴重な学びを得ることができた。村岡典嗣という共通の研究対象をきっかけとし、卒業に際し、本村先生ご本人に僭越ながら連絡を取り、今後ご指導していただきたい旨を伝えた。

卒業後、私は河南省の鄭州大学歴史学院に就職した。河南と岡山、鄭州大学と岡山大学とは縁が深い。岡山市は1981年に河南省の洛陽市と国際友好交流都市協定を締結後、多彩な交流活動を行ってきた。また、岡山大学は鄭州大学を含む河南省の大学と交流協定を締結し、双方の理解と学術交流促進の環境を整えた。河南省は中華文明の重要な発祥地であり、悠久の歴史・伝統と深い文化の蓄積がある。そのおかげで、人文学科、特に歴史・文化研究の面で恵まれた環境だといえる。鄭州大学における歴史・文化研究への熱意は、歴史学院創立に垣間見ることができる。本学院は最も早く創立された学院の1つであり、現在では4学科合わせて約100人の教員が在籍している。岡山大学との交流については、これまで理・工・医などの分野で継続的な交流・協力を行っているが、文系の専門分野での交流は非常に限定的であった。岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科のような新興の研究科との協力も行われていないのが現状である。そのため、双方の交流にはまだ大きな発展の余地があると考えていた。

2020年から今まで新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、日中を含む学生・学者の交流に大きな支障が出ている。そのため、交流の新たな形について、私は本村先生と相談を重ねた。交流の参考として、岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科ヒューマンケアイノベーション部門日本文化論分野と西安外国語大学日本文化経済学院との共同研究会（2020年11月28日、日本文化研究会、オンライン）、及び岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科と南開大学日本研究院との学術交流会（2021年3月27日、オンライン）をオンラインで見学し、新たな交流方法を模索した。問題として挙げられたのは、日本語学院や日本研究機関と異なり、歴史学院は日本語の授業もあるが、教員や学生は日本語を上手に使用して十分な交流ができていない

*1: 鄭州大学歴史学院

*1: School of History, Zhengzhou University

という点である。その一方、歴史学院には日本に限定されない歴史・文化に関する多様な分野の研究者がそろっている。日本史を含む各国史のような伝統的な歴史研究の領域だけでなく、思想史・医学史・人口史・科学技術史のような専門的・学際的な領域もある。また、縦の関係だけでなく、外国語学院、特に日本語学科と密接な協力関係を結ぶなど、横のつながりも重視している。このことを踏まえ、中国語・日本語の通訳を入れて、2021年11月に双方に共通する研究分野の教員による第1回学術交流会をオンラインで開催することとなった。

3. 学術交流会の開催

11月27日に第1回オンライン学術交流会が開催された。岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科副研究科長の吉葉恭行先生、歴史学院執行院長の安国楼先生が開会の祝辞を述べた。本村昌文先生と呉志遠先生は司会、岡山大学上海事務所の李憲龍先生、鄭州大学外国語学院日本語学科の佟曉南先生、張燕燕先生が通訳を務めた。

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科の吉葉恭行先生が岡山大学および同研究科の発展、研究理念、在学中の中国人留学生の状況を紹介した後、近代から今日までの科学技術史、特に産学官連携の問題についての研究を紹介した。本村昌文先生は中国の大学との交流の成果、三つの研究分野、すなわち近世日本の朱子学・陽明学研究、老い・看取り・死に関する思想史研究、村岡典嗣研究を発表した。日笠晴香先生は、終末期患者の医療・ケア・意志決定に関する倫理問題の研究を述べた。村上麻佑子先生は、伝染病、気候、飢饉などと古代日本貨幣の歴史との関連性を説明した。浅井雅先生は、近世の藩校を中心に儒学が日本の教育に果たした役割を紹介した。

交流会の開催にあたり、事前に本学院の意見として、日本語を専攻していない学生が日本に留学した場合、学術研究、生活や交流などにおいて日本語の応用能力が問題として挙げられることを伝えていた。そこで、本村先生はグローバル人材育成院の毛利貴美先生、難波えみ先生を招き、岡山大学の留学生向け予備教育プログラムを紹介してくれた。両先生は留学生の学習認知、日本語教育に関するそれぞれの研究成果も述べた。

鄭州大学の発表として、歴史学院副院長の呉志遠先生が、歴史学院運営の特色、学術成果、国際交流などについて説明した。国学は歴史学院の特色ある学科で、中国古典と思想を専攻する学生を養成している。国学科の魏涛先生は古代洛陽に形成された儒学の流派「洛学」について発表し、東アジアにおける儒学の受容をめぐる双方の今後の交流を期待した。中国史学科の李莎先生は、自身の中国古代人口史、医療史についての研究を述べた。河南省は昔から何度も災害や戦争に直面しながらも、今や1億人を抱える、人口の多い省となった。そのため人口・医療・救済は研究しなければならない問題である。現在の鄭州大学も医学に重点を置いた大学であり、歴史学院も医療史の分野で医学院と提携している。また、李先生は学院が請負い、自身も参加している校史編纂のプロジェクト、特に初代学長で思想家の嵇文甫先生に関する研究と資料整理について紹介した。馬偉華先生

は中国と西洋の科学技術交流史についての研究を述べ、今後、イエズス会士や現代科学家研究などの分野で両学の交流ができることを期待した。世界史学科の鄭辟楚先生は日本近世の年貢制度についての研究を紹介した。私は村岡典嗣に関する研究を発表し、世界史学科が現在取り組んでいる「世界歴史における疫病」というプロジェクトについても紹介を行った。

日中文化交流史は鄭州大学外国語学院日本語学科の特色ある研究であり、歴史学院と密接な協力関係を長年築き上げている。その分野に携わっている教員も今回の交流会で発表を行った。張燕燕先生は日本語学科の状況を説明し、自身の古代中原社会の対日交流と人物移動などの研究を発表した。郭崇先生は『本草綱目』の日本での受容についての研究を述べた。河南省は中医学の発祥地であり、その学問は東アジア諸国にも深い影響を与えている。現在、河南省は中国の主要な労働力輸出省としてなっており、そのため高齢化問題が深刻である。つまり、中医学に関する研究は高齢化対策としても大きな意義があると主張した。

双方の研究者の発表を終えた後、今後の交流について意見交換を行った。研究テーマや問題関心が重なる研究者も多く、個々の研究者同士で交流を深めていくことができることを確認した。また、岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科で現在進めている老い・看取り・死をめぐる研究プロジェクト（科研費・基盤研究A「日本社会の「老い」をめぐる分野横断的研究」〈代表：本村〉等）と鄭州大学歴史学院世界史学科で進めている「世界歴史における疫病」のプロジェクトの成果を共有し、さまざまな共同研究へ発展させていく可能性について話し合った。

今回の交流は両大学の素晴らしい発表を知ることができた良い機会となった。双方の学部生・大学院生間の学術交流、日本語及び日中文化の学習について策定している。まずはオンラインで説明会や研究会を行う予定である。新型コロナウイルスの感染の収束後は、教員や学生の相互交流が以前よりも活発になることを期待している。

4. おわりに

『論語』には「以文会友、以友輔仁」（文を以て友を会し、友を以て仁を輔く）という言葉がある。共通の研究分野が、さらなる連携のきっかけとなる。今回の学術交流会を通じ、本学の参加者は鄭州大学と岡山大学との間において、地域の特徴、大学運営のスタイル、研究分野など、さまざまな面で共通点があると実感したとともに、今後のさらなる交流に期待を寄せた。今回の学術交流会は、20年にわたる両大学の協力関係に新たな発展性を示したと言えるのではないだろうか。現在進行形で次の交流プランを計画中であり、一部はすでに実行されている。今後の交流は双方の学術研究、学生の育成等において、新機軸を打ち出し、お互いの友好がさらに深まることを心より願っている。